

藏彝走廊のチベット族と漢族

松岡正子

(愛知大学)

- I. 藏彝走廊のチベット族
- II. 西番の民間暦と漢族の農曆

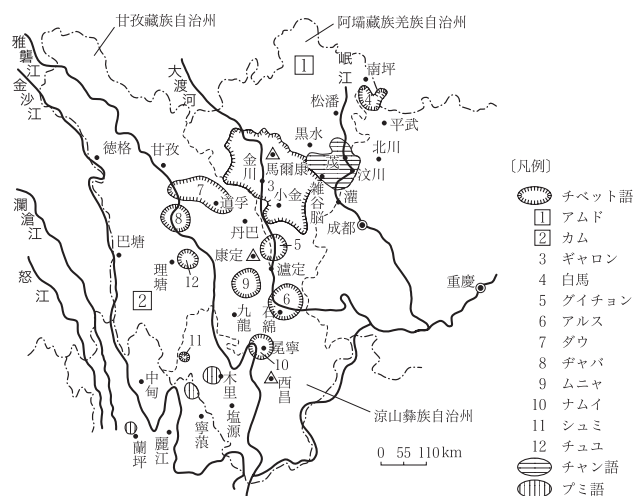
キーワード：藏彝走廊 六江流域 西番 ナムイとプミの民間暦 漢族の農曆（官暦）
 <西番>の新年 漢族の春節 シャーマン 日読み 山の神祭り

はじめに

四川、雲南、チベット自治区が接する「藏彝走廊」地区は、南北に流れる6つの大河によって形成された高山峡谷地帯で、大河に沿って古くより中国西北部から幾つもの集団が南下し、移動や融合が繰り返された土地である。そこには、主に、かつて西番とよばれたチベット族諸集団やイ族が居住し、長期にわたって独自の生活生産リズムによって暮らしてきた。しかし藏彝走廊のチベット族諸集団は東に漢族、西にチベット族、直近にはイ族と対峙してきたため、様々な方法によって彼らとの共生をさぐらねばならなかった。

本報告では、独特の民族意識をもつ藏彝走廊のチベット族が異民族集団との共生の中でどのような方法を選択してきたのか、特に中華人民共和国成立後、急速に政治的経済的圧力を強めてきた漢族社会に対してどのように適応しようとしたのか、「暦」という視点から考察する。

〔図1〕「西番」諸集団の言語分布



〔出所〕 四川省人口普查辦公室編『四川藏族人口』（中国統計出版社、1994）4-6頁、孫宏開「六江流域的民族語言及其系屬分類」（『民族學報』、1983）1983-3、池田巧「西南中国〈川西民族走廊〉地域の言語分布」崎山理編『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』（国立民族学博物館調査報告 39、2003）110頁より作成。

I. 藏彝走廊のチベット族

1. 藏彝走廊

(1) 定義 (特徴) [李紹明、石碩、李星星 2005]

- ①六江流域：川、藏、滇に跨る横断山脈を南北に貫流する6つの大河（怒江、瀾滄江、金沙江、雅砻江、大渡河、岷江）流域の高山峡谷地帯、平均海拔高度2000～4000m
- ②藏緬語族（チベット・ビルマ語系）の藏語支（チベット語群）と彝語支（イ語群）の民族集団が主に居住→「藏彝走廊」
- ③歴史民族走廊：古くより様々な集団が大河に沿って移動と融合を続けた地域
→複雑な民族構成や言語系統（図1） [池田 2002：119]
- ④古層の文化：チベット諸集団の言語、仏教伝来以前の宗教（白石、山の神）、石棺葬、石碣、猪膘、母系制

(2) 研究状況

- 1978年09月 費孝通が全国政協会議で提唱
- 1981年11月 中国西南民族研究学会にて検討
- 1982年05月 中国西南民族研究学会六江流域民族科学総合考察隊：雅砻江と怒江
李紹明・童恩正（1983）『雅砻江下遊考察報告』（1985）『（同）上遊』
楊 編（1984）『独龍族社会歴史総合考察報告』『滇藏原考察報告』
伍加倫・江玉祥主編（1994, 95）『古代西南丝绸之路研究』四川大學出版社
孫宏開（1983）「川西民族走廊地区的語言」等
- 2001年00月 四川大學藏学研究所＜藏族族源与川滇西部及藏東古文明研究＞
- 2003年11月 藏彝走廊歴史文化學術討論会（四川大學藏学研究所・中国西南民族研究学会）
石碩主編（2005）『藏彝走廊：歴史と文化』四川人民出版社

2. 藏彝走廊のチベット族諸集団と西番⁽¹⁾

藏彝走廊のチベット族は、四川省の康定を中心として、甘孜州、阿壩州、涼山県、雲南省北部に分布し、チベット族総人口5,416,021人（2001）の約25%を占める（図1）。言語系統の違いによって漢・チベット語族チベット・ビルマ語系のチベット語群集団とチャン語群集団⁽²⁾の2つに大別される。前者は藏彝走廊チベット族人口の約85%を占め、アムト語やカム語を用い、チベット仏教を篤く信仰する。後者は11の言語グループに分けられる。このうち康定以南の8グループ（川西南チベット族）にはチベット仏教伝来以前のシャーマンを中心とした固有の宗教が保持されており、かつては「某羌」と称され、唐代以降は漢族から「番（あるいは西番）」とよばれた。

西番の語は、広義には明清時代以降、中国西部に居住したチベット系集団を総称し、「番」とも記された。さらに民国期の西康では、「番」は藏番と康番、＜西番＞の3つに区別されており、＜西番＞は前述の康定以南の8グループに重なる。狭義の西番は、この＜西番＞に相当し、広義のそれより早く、すでに晋代『博物志』に初出する。

＜西番＞には、チベット仏教伝来以前のシャーマンや白石に象徴される山の神信仰が保持されており、藏彝走廊の古層文化の特徴を色濃く残している。＜西番＞は、中華人民共和國下の第1回の民族識別（60年代）ではチベット族とプミ族、＜西番族＞の3つに分けられた。西番の語は、漢族側はこれを蔑称として用いたが、ナムイは自らが漢族やイ族だけでなく、他のどの西番諸集団よりも高貴であるという「大西番」の誇りをもっており、＜西番族＞を民族名称として選択した〔松岡2006：221～234〕。

Ⅱ. 西番の民間暦と漢族の農曆（官暦）

1. 西番の民間暦とシャーマン

年の初めをいつにするのか、日常生活のリズムをどのように組み立てるのか、各民族集団には、それぞれ地域の自然的歴史的条件に基づいた独自の生活生産暦（民間暦）がある。年中行事や冠婚葬祭などの民俗行事、種蒔きや収穫などの生産活動に伴う儀礼は、そのリズムを構成する伝来の主要な要素である。

では、各集団の民間暦はどのように決められたのか。チャン語群の言語をもつ<西番>諸集団およびチャン族やプミ族には、山の神を核とする固有の信仰があり、それぞれのシャーマンが様々な儀礼の日取りを決めて、主宰してきた。日取りを決めるとは、日の吉凶を判断する「日読み」である。日読みは、シャーマンのいないムラでは古老が行い、現在でも続けられている。日読みとは、その地域社会での長期にわたる生活や生産の体験、自然に関する知識などに基づく一種の技術ともいえる。冕寧県聯合郷のナムイは、最大の行事である山の神祭りを現在も古老の日読みによって行う。チャン族やプミ、シュミなどの<西番>諸集団の山の神祭りも同様である。なお山の神を祀るのは、日常的には1と15の日であること、祭りは秋の幾日かであることから、前者は月、後者は太陽の運行を目安にしているのではないかと推測される。

<西番>諸集団のシャーマン〔プミのシャパ、<西番>（木里県水洛郷）のアーイ、ナムイのピおおよびチャンのシピ〕は、冠婚葬祭の日取りもさめる。またナムイやプミ、<西番>の社会では、現在も病気の原因をシャーマンに判断してもらい、病因を除く術を行うとともに、多くの場合、病は山の神の意向に反したからだとして犠牲を捧げて祈る。

2. 漢族の春節と<西番>の新年

異なる民族集団が共存共生する社会では、その関係が密になるとともに互いに共通する「暦」が必要になってくる。現在の<西番>諸集団の年中行事には、漢族やイ族、藏族のいろいろな行事が時代をおって導入されており、「暦」が共生の一つの手段であることをうかがわせる。

非漢族にとって「春節」を導入することは、漢族を主体とする中国社会の中で生きていくためには選択の余地のない必要条件であった。春節を一年の初めとする農曆は、かつて漢族社会においては官暦であり、民国期に新暦が正式な国家の暦とされて以降も伝統行事は依然として農曆で行われ、新暦と旧暦が並存している。

プミの場合、伝来の新年である「ヲシ」が春節にかわるのは、中華人民共和国下で政治的な統制が末端のムラにも及ぶようになってから、徐々にである。学校や公的機関が春節に長期休暇をとるようになり、初めは「ヲシ」を行うとともに、春節にもヲシと同様のことを行ったが、次第に外地にでた家族がもどってくる春節を新年として、従来のヲシの活動をこの日にし、ヲシを行わなくなった。ナムイのソシュも同様である。新年の春節への統一は、非漢族にとって、たんに漢族社会に適応するというだけでなく、国家の暦を受け入れて国民になることも意味している。現在、彼らは伝来の活動を行うとともに、除夜のテレビ番組（春節聯歓会）も楽しみにしている。

ところで<西番>の新年は、戸別の白石（屋上や屋内の神棚に置く、山神を象徴する）への祭祀と一族による山の神祭り（山頂の石積み塔）を重要な儀礼とする。山の神祭りは、本来、シャーマンの日読みによって決定されるものである。しかし人民共和国成立以降、様々な政治運動によってシャーマンは高齢化し、激減した。義務教育の普及や若年層の出稼ぎの増加などのために、古老の知識の伝承も困難になっている。次世代にも山の神祭りが行われるのかはわからない、と人々は語る。

しかし一方で、涼山州西昌にすむナムイが都市において秋の山の神祭りを復活させたと伝えられている。彼らの山の神祭りは、ムラで行われる神事としてのそれではなく、他の民族集団（特に漢族）に対する自民族のアイデンティティを象徴するものといえるようである。

〔表1〕西番諸集団の年中行事

民族 地域	西番・チベット族	シュミ・チベット族	プミ・チベット族	プミ族	漢族	カム・チベット族	ナムイ・チベット族	チャン族	
地域	木里県 水洛郷	木里県 水洛郷	木里県 桃巴郷	(雲南)麗江県 普花村	木里県 桃巴郷		九龍県子耳郷	冕寧県聯合郷	理県蒲溪郷
11	「殺年猪」	「殺年猪」	「殺年猪」				祭山神 ⁵⁾		
12	8 屋上の竹竿交換 1) 経文旗交換 「ラシ」(12.9~13) 9 祭山神(屋上) 祭祖先(三脚鼎) 祭水神(水源) 「初水」	8 屋上の竹竿交換 9 祭山神(屋上) 祭祖先(三脚鼎) 祭水神(水源) 「初水」	7 屋上の鉄三叉交換、「成年礼」 8 祭山神(屋上) 祭祖先(三脚鼎) 祭水神(水源) 「初水」			19「尼都」 29	「ソシュ」 ⁴⁾	7 「過年」	
10	阿珍家、全住民 に肉をふるまう	10 宗族ごとに宴会 「鍋庄」	9 「祭山神」 (宗族)						
12	家で宴会「鍋庄」	12 宗族ごとに宴会 「鍋庄」	11 宗族ごとに宴会 「鍋庄」	「殺年猪」	「殺年猪」		「殺年猪」	「殺年猪」	
13	「祭山神」 (全住民) 供養「騫馬」	13 「祭山神」 (全住民) 供養「騫馬」							
1	「春節」(1.1~3) ²⁾	「春節」(1.1~3) ²⁾	「春節」(1.1~5) 「ラシ」と同	30 祖先迎え(墓地) 「ラシ」(春節)(1.1~5) 1 祭祖先(三脚鼎) 祭水神(井戸) 「初水」 「祭山神」	「春節」 1 祭山神	3 「黙朗欽波」 24	30 祭「ロ」(屋上の白石) 「春節」 1 祭祖先(鍋庄) 祭水神 3 「祭山神」	30 祭白石神(屋上) 「春節」 1 祭祖先(鍋庄) 祭水神	
2									
3		3) 中旬(撒秧節)(米)							
4		4) 嘗新節(大麦)		5 「端午節」 (「遊山」)	5 「清明節」	4 「牛埕」			
5									
6							16-17 《火把節》	19 《観音会》	
7				12 祖先迎え (村の入口) (七月半)	(七月半)		24 《火把節》	5 《端午節》	
8				14 「戒背」 祖先送り (村の入口)				19 《観音会》	
9								15 《中秋節》	
10		10 《嘗新節》 (トウモロコシ)				25 「昂曲」		19 《観音会》 「ヌルヌ」 (祭山神)	

〔注〕 1) 祭山神では、西番、シュミ、プミ、ナムイのチベット族およびプミ族は「煙祭」を行う。「煙祭」では、マツの枝をもやして煙をあげ、煙にチンクー麦の種子、黄酒を注ぎ、ホラ貝を3回ふき、念経、小麦の種をまく。
2) 「春節」は、西番、シュミ・チベット族は法定の3日間のみ、プミ・チベット族は現在は「ラシ」より「春節」の方が盛ん、プミ族は「春節」を「ラシ」とよぶ。
3) 「撒秧節」「嘗新節」は宗族ごとに行う。三脚鼎(鍋庄)に新米と黄酒を供え、煙をあげて祖先を祀り、バター茶を3回飲む。
4) ナムイはかつて旧暦12月に新年を行っていた。
5) 木耳ナムイの祭山神は、毎年、一族単位で行い、3年に一度ムラ全体で、10年に一度地域全体(複数のムラ)で行う。
〔凡例〕 □ は西番の伝統的祭り
< > は漢族の行事
《 》 はイ族の行事

〔出所〕 1991年8月、2001年3月、2004年11月、2005年9月現地での聞きとりにより作成。

〔注〕 (1) 西番の語は、本文中では、西番(広義)、<西番>(狭義、川西南チベット族)、<西番>(四川省木里県水洛郷)の別がある。
(2) チャン語との同源語彙の比率は、クイリャン27%、ジャバ23.1%、ムニヤック25.7%、アルゴン21.3%、アルスー27.8%、シシン25.9%、ナムイ26.5%、プミ28.9% [格勒 2002: 38]。

〔参考文献〕

池田巧 (2002) 「西南中国<川西民族走廊>地域の言語分布」『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』(国立民族学博物館調査報告 39) 64~114
格勒 (2002) 「氏羌南遷と普米族」『普米研究文集』雲南民族出版社 37~39
何耀華 (1982) 「冕寧県聯合公社藏族社会歴史調査」『雅砻江下遊考察報告』 2~37
石碩編 (2005) 『藏彝走廊：歴史与文化』四川人民出版社
李紹明 「“藏彝走廊” 研究与民族走廊学說」 3~12
李星星 「論“藏彝走廊”」 32~68
松岡正子 (2000) 『中国青藏高原東部の少数民族 チャン族と四川チベット族』ゆまに書房
(2003) 「西番におけるプミ語集団—四川桃巴プミ・チベット族と雲南普花プミ族を事例として」『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』風響社
(2005) 「西番諸集団の社会—四川省木里県水洛郷の<西番>チベット族を事例として」『中国の民族表象—南部諸地域の人類学・歴史学的研究』
(2005) 「川西南の西番における民族識別(1)—プミ語集団の場合」『紀要』126号
(2006) 「川西南の西番における民族識別(2)—西番族の歴史の記憶」『紀要』127号